

私の研究遍歴—キンポウゲ科の水生植物バイカモ類について

札幌市 高橋 英樹

私の研究遍歴の中でキンポウゲ科とのかかわりとなると、水生植物のバイカモ類が挙げられる。一時期（およそ20年くらい前）、バイカモ類の分類にはまったことがあるのだが、なかなかやっかいな仲間では結果としては学术论文にできず、一部が調査報告になったにすぎず、振り返ってみれば慚愧の至りである。

なお日本においてバイカモ類はキンポウゲ科キンポウゲ属 *Ranunculus* に含まれること（原 1947, 田村・清水 1982, 門田・西川 2016 など）が多いが、独立したバイカモ属 *Batrachium* を認めることもある（北村・村田 1972）。お隣の国ロシアでも細分主義者スプリッターが多いこともあり、キンポウゲ属から独立させてバイカモ属が認められることが多い（Luferov 1995, Barkalov 2009）が、ここでは日本側の見解に従い *Ranunculus* を使う。

せっかくの機会なので、調査場所ごとにどんなことをやっていたかを紹介しよう。

1. 釧路湿原

1988年から5年間、北大農学部の辻井達一教授らを中心として、釧路湿原を対象にして湿原生態系保全のための調査が行われ、釧路湿原のフロラを見直す中で、釧路湿原に流れ込む川におけるバイカモ類の生育調査を行った。実際は、Wiegleb (1988) により、釧路湿原から新種オオバイカモ *Ranunculus ashibetsuensis* Wiegleb が報告されたため、バイカモ（広義）*R. nipponicus* Nakai との安定的な差異を明らかにしたいという気持ちがあった。

ここでは、釧路湿原周辺での2分類群を含めたバイカモ類の生育地図（図1）を報告した（高橋 1992）。この報告書はおそらくごく限られたところにしか配布されていないと思われるので、ここにその時の生育地図を転載した。その後、釧路湿原のフロラをまとめた際には、結局オオバイカモをはっきりと認められず、バイカモだけを認めた（高橋・高嶋 1993）。最新の日

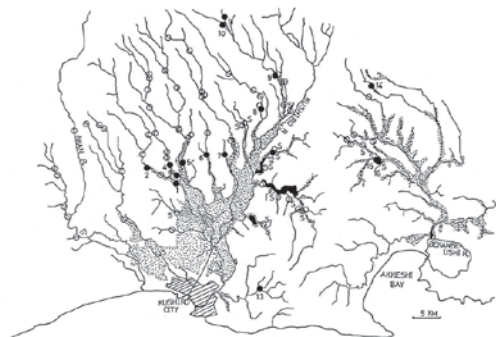


図1 釧路湿原地域でのバイカモ属の生育地点(黒丸)。丸印は調査地点。Sはミクリ属の生育地点



図2 バイカモ 2017.7.11 上士幌町十勝三股 (五十嵐博氏提供)